

---

# 夏休みにあった それだけの話

滾

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

夏休みにあつた それだけの話

### 【Nコード】

N8884A

### 【作者名】

滾

### 【あらすじ】

作者の夏休みでの体験談です。それだけです。

**(前書き)**

単なる体験談なので、別に読まなくてもいいかもしれませんが。はい。

僕は休みの日に自転車に乗ってどこかに行くのが好き。

行く先を決めずに、音楽を聴きながら携帯電話と財布（毎回千円以下）を持って自転車で走る。

それは“不思議な話”でも書る（あれは全部が全部作者の話ではないが、一部実体験の元に書いている）。

あの日も、僕は図書館からの帰り道に道草をした。結構長い道草だった。

図書館を出たのは四時ちよっと過ぎ。家まで五分の所を、僕は反対に向かつて走っていった。

僕が住む街は田舎。結構田舎。ちよっと山の方へ行けば四方が田畑に囲まれるなんてザラ。

山がスグそこにあつて、隣に川があつて。そんな道を通ると小説のネタが思い浮かんでくる気がする。気がするだけ。はい。

だからその日も走た。そりゃもう走った。

見たことの無い道を選んで、そっちに進んでいく。

で、しばらく走った。一時間くらい走ったと思う。携帯電話の時計機能を見ると五時を回ってた。

片道一時間だから、帰るまでに一時間かかると言うことになる。

だったらそろそろ帰ったほうがいいだろう。

僕は別段なにをするでもなく家へ帰ることにした。

まあ、毎回何かをするわけではないけども。

帰る途中、川？みたいな所の横を通った。

あれだ。田んぼがある地域に住んでる人はわかると思うけれども、

田んぼの横に一突きギリギリで渡れるか渡れないかの水が流れてる川？がある。

あれの隣を走ってた。

帰るのが遅くなると何かとアレだ。結構速めに走ってた。

だから、あの時アレを見つけれられたのは凄いことだと思う。

「ん？」

と言ったかは覚えはない。けどそんな感じで僕は川の中を見た。

一瞬だったけど、川の中で何かバタバタ羽を飛ばたかせるように見えた。

が、別に気にすることなく走った。

が、気になった。

なったから、止まった。停まった。

川に落ちないギリギリの所に自転車を停めて、僕は何が流れているのかを見た。

町長だった。

間違えた。

蝶々、だった。

アゲハチョウだ。

生きてる。

羽を飛ばたかせている。

僕はソレを一回見送って、

「ふんはッ！」

追いかけた。

変な掛け声で走った。ソレは確かだ。覚えてるもん。

僕は、何でか解らないけどあの蝶々を助けよう、と思った。

こういった川？には、一定の間隔を置いて人一人が通れる板が渡してあるもの。

そこに乗って、僕は川に向かって両手を伸ばした。

蝶々が流れてくる。

.....

避けやがった。

スー・・・、と僕の両の手を通り抜けていった。

僕はもう一回走った。次の板まで走った。

で、もう一回繰り返した。

繰り返した、ってことは、

そうだ。

また通り抜けていった。

だから僕はもう一回次の板に向かった。

そして、また手をかざす。

「あー」

後ろで声がして、僕は危うく川？に落ちるところだった。

振り返ると二人の女の子が居た。女の子、と言っても高校生くらいの。僕と同じくらいの。

「あー、何か落としたんですか？」

と言われた。

が、今僕に人と会話している暇は無かった。

川？と二人組みの“れでいーズ”を交互に見て、僕は切羽詰ってこ  
う叫んだ。

「チヨウです！チヨウ！」

馬鹿丸出したな、と書いてて思った。

案の定、

「はあ？」

って言われた。同時に言われた。しかも蝶々は手の横を通り抜けて  
いった。

泣けた。

再び走って次の板に回り込む。すると二人組みの“れでーズ#も走ってついてきた。

何用デスカ!?

「え?何を落としたんですか?チヨウ?ってなんですか?」

疑問を何かずつと聞いてくる。

こっちはそれどころじゃないのに。

「チヨウですって!チヨウチヨウ!蝶々!」

「「は?」」

解るでしょう!蝶々だつて言ってるのに!

またハモつて「は?」つて言われた。

「え?蝶々が落ちてるんですか?」

「流されてるんですか?」

「そうです!」

僕は板の上に乗つかつて両手を構える。

「え?蝶つて・・・(アナタの?みたいな視線)」

もう無視して蝶々捕獲作戦に移行。

が、手を水に差し入れると水が手を中心に左右に分かれるため、中

々手の中に入つてこない。

もう一回!と、僕は後ろを振り返つた。

が、

「あ」

もう板が無かつた。つていうか、分岐になつてて、左には柵があつていけないし、右は地下?見たいになつてて水が見えない。

駄目か・・・。

僕は諦めて自転車に戻つた。

「え?駄目だつたんですか?」

「はあ・・・」

「・・・」

「・・・」

自転車にまたがって、家に帰ることにする。疲れた。

ペダルを漕いで、ふと分岐の右のほうを見た。

「あ」と僕。

「「え？」」と“れでいーズ”。

いや、アンタ達ではなく。

分岐の先、地下？見たいな事になってた先。

ちよつと行けばまたコンクリートの蓋がなくなって川？が見れるようになった。

左に行つてれば終わりだが、まだ……。

僕は自転車を走らせた。

「え？え？」

何でかついてくる“れでいーズ”。

僕は分岐に沿つて走つた。川？を凝視しながら走る。

蝶……蝶……。

あんなに蝶の安否を気にしたのはあのときが初めて最後だと思う。

そして、

「あ、居おつた！」

僕は自転車を放り捨てるように降り、板を見つけて蝶々捕獲作戦再開。

再び手を出す。もう片手で狙いをつけて捕まえることにする。  
で、

フワ、つて感じに手に蝶々が乗つた。

「よ、良かった……」

ふう、と僕は息をついた。

「え、捕まえましたか！？」

「はあ、一応」

“れでいーズ”は結局ついてきてた。

「あれ？でも飛ばないですね？」

「濡れてんじゃないスか？水の中に居つたから」

「あ……」

とりあえず手に乗せた蝶々を草の上に置いてみる。と、蟻螂出現。

慌てて救出して、飛べるまで放すのは止めたほうがいい、と“れでいーズ”に言われる。

「けど、俺帰らないと・・・」

「じゃあ持って帰ればいいじゃない」

ジヤニーさんみたいに簡単に行った。

「はあ」

かくして僕は、“アゲハチョウを手に乗せたまま自転車にまたがり帰宅”を余儀なくされた。

とりあえず“れでいーズ”と分かれて帰宅。

左手にはアゲハ。

落とさないように慎重に走った。

途中、公園で遊んでいた少女少女達を見つけた。

彼等は蝉取りに勤しんでいたらしく、僕はそこにアゲハ片手に歩み寄った。変な構図だ。

「もし（話しかけてる）」

「え？」

何？と、短パン小僧が振り返った。残念ながらポケモンをくりだしてくる事はなかった。

「わ！アゲハや！」

「ホントや！アゲハや！」

「え？なんで手にのつとるの？」

純粹無垢な少女少女達。これなら誰か一人はこの蝶々を飼ってくれるだろう。

そんな期待に胸膨らませていた僕は、気付くと一人で公園に居た。皆は「えー？虫は逃がさなアカンのやよー」とか言って帰っていた。

僕はアゲハと人生について考えた。

ともかく、と僕は家路を急いだ。

再び手にはアゲハ。

帰る途中途中で何度か放そうと試みたが、一向に飛ぶ気配は無い。

やっぱり家の庭に放すか・・・。  
僕はそう考えて、そのまま“左手onてふてふ（蝶々）”スタイル  
で帰った。

家に着いた。

案外早くついた。6時を回ってた。

僕の家の庭には花やら樹がいっぱい生えてる。てか生やしてる。  
だからそこに放す事にした。

花の中央に乗せて、僕の役目はおしまい。

次の日。

また僕はどっか行くことにした。

ふと、昨日アゲ八に乗せた花を見た。

まさか、と思ったが、花の上にアゲ八は居なかった。

ああ、良かった。

胸を撫で下ろし、

「！」

僕は気付いた。

花が植えてある根元、アゲ八が倒れてた。

倒れてた、って表現はおかしいかもしれないけど、そんな感じだっ  
た。

力なく横に倒れてた。

死んでた。

そーゆーのって、何でか一目で解る。

ああ、死んでる。と、思った。

僕は土を掘って、アゲ八を埋めた。

「ごめん・・・」

と言った。

や、僕は悪くない気はする。

多分悪くない。

けど「ごめん」だった。

何でか「ごめん」だった。

あの時助けたのは正解だったのか。

自分の部屋に戻って考えた。

間違いだっただかもしれない、と思った。

あの時助けて無くても、もしかしたら自力で助かって、自力で羽乾かして飛んでたかもしれない。

僕が助けたから死んだんじゃないか。そう思えた。

ただ、僕は結果的に助けたことは良かったと結論付けた。

まあ、確信は無いけども。

今、僕の携帯電話の待ち受け画像はあのアゲハの写真。

助けたときに手に乗せた状態で撮った。

この写真のアゲハはまだ生きてる。

生きてた、なのか。よく解らないけども。

今年の夏休み。

序盤のまだ暑い頃にあった、

ただ、それだけの話。

(後書き)

蝶々は僕に助けられて良かったのかなあ、と思いました。それだけです。

例によって、楽しんで頂ければ幸いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8884a/>

---

夏休みにあった それだけの話

2011年1月13日06時36分発行